

---

## 巻き込まれ体質の傍観者

--

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巻き込まれ体質の傍観者

### 【Nコード】

N5062X

### 【作者名】

一一

### 【あらすじ】

事勿れ主義の主人公・春山<sup>ハルヤマキョウジ</sup>矜慈が、父親の借金を返済するために謎の海外組織（もしかしてマフィア？）に拉致され、こきつかわれ、気に入られる。そんな話

## つけられた俺

俺をRPGとかで例えるなら、「通りがかりの村人」とかじゃないだろうか。

旅先でもう知ってるような豆知識を教えてくれる、はっきりいってどうでも良い、とるに足らない存在だ。

そういうモブキャラはだいたい表情がない。だってゲームをやっている人はそんなモブキャラの事は気にもとめないから、表情を作るだけ金がかかることを知ってるゲーム会社が表情を作らないせいだろう。

まさにその通りがかりの村人的存在である俺も、あまり感情の起伏というのが激しくない。それに顔面の筋肉が硬直しているのか、ほぼ無表情だ。そして、それが原因で唯一の肉親である父親から嫌われてるのも良く分かっていた。

父は俗にいう主人公タイプというやつで人に喜んでもらうのが好きな人だった。だからよくものを買ってきては俺にくれたものだったが、素直に喜びを表現できない俺にとっては最早苦痛でしかなかった。

そのたびにこいつは俺の子供じゃないと酒を飲みながら大声で近所に言いまわったり、ギャンブルをしてやるせない思いをぶつけていた。何処かで遅くまで遊んで帰ってこない日もあった。

だがそれも今となってはどうでもいい。

そんな父親はもうこの世にはいない。

昨日死んだからだ

さんざん遊んで貯めたらしい借金三億円を俺につけて。

## 回想する俺 1

事の顛末はこうだ。

父さんの葬式が終わり家に帰るとそれなりにデカイうちの家のドアに「差し押さえ」というシールのような赤い札が張ってあった。まだ夕方にも関わらずあたりはそろそろ冬のせいか大分暗くその差し押さえシールが異様に光って見えた

ドラマとかにある借金とりが張り付ける札だよな…なんでうちに…

理解出来なかった。母さんが病気で死んでもう何年もたっているが普通に生活出来ていたし、どちらかというと普通より裕福な方だった。

父さんは大手企業の社長で俺はその嫡男。

金に困るような生活は送っていなかったし、ましてや借金で家を売り払うなんて考えてもみなかった。

どういう事だ？父さんはいつのまに借金なんてしてたのか…？  
とりあえず差し押さえとなったからには家から出ていかないといけないし、今となっては真相も聞けないであろう借金の問題もこの家を売り払えば片付くだろう。なんせ、都会の一等地にたっているし、家もなかなかデカイから。生憎俺にはこの家に愛着とかそういう類いのものはないし、いずれ売ろうと思っていたから好都合かもしれない。ただ、父さんの借金で消えると思うと些か腹がたつが。

と、考えながら俺は荷物をまとめる為に家に入り二階にある自分の部屋に向かった。

自分の荷物をまとめ一階にあるリビングにおりてくるとテーブルの上に白い紙切れがおいてあった。

まさか父さんが死ぬ前に残した遺書とか？

と思いその紙を手にとった。

なるほど、いくら憎んでいたとはいえ仮にも息子。最後まで父親らしいことがしたくなったのかなんて、微笑ましい思いは一瞬にして崩れ去った。

借用書

¥3000000000

見た瞬間目をしばたたかせ0の数を書き始めた。

さ、さんおく…どうやって借金したんだ？

ただのローン会社じゃ無理な金額…闇金か。

父さんも堕ちたなと思った。息子に残すのが三億円の借金とは父親失格の前に人間失格だ。

ここでこの家を売り払ったとして返済できる額は多く見積もって精々一億、となると俺は残りの二億をなんとかしなくちゃならないわけ…

と、考えこんでいると後ろからコツコツと足音が聞こえてきた。

不動産の職員か？いや、こんな暗い時間に来るわけない。しかも靴

を脱いでいないらしい...ってことは...

取り立てか。

## 回想する俺 2

取り立てらしい足音が背後から響いている。足音の間隔から歩幅は狭そうだしコツコツというどちらかという男の革靴というより、女性のパンプスのような音からして、女性だろう。

取り立てに女性を起用する会社があるのか。今じゃ男女差別とかそんなのはこういう危ない仕事にも適用されるんだな。

なんて、どうでも良いことを考えながら振り向くと、案の定そこには女性が立っていた。

「あなたが春山矜慈くんかな？」

見た目どおり抑揚のない声で女性が問う。

その女性はパーツが整い過ぎてまるでマネキンのような顔をしていた。

微笑みをたたえている顔が石膏で塗り固められたかのように口もと以外ピクリともうごかない。

そのくせ口調は妙に柔らかく馴れ馴れしささえ感じさせる。

それ故か女性はある種の不気味さを醸し出していた。

「はい。」

嘘について偽名を名乗っても無駄だろう。

なんせ三億円も借金出来るような闇金会社だ。それなりにデカイだろうし、取り立てにも事を穏便に運びつつも、もしの場合は強行手段に出れるような人材を起用しているはず。

今回女性が来ているのは力量に信頼をおいているからであって、相

手は金持ちの坊っちゃん一人だと油断している訳ではないと思う。

「そっか。」

「はい。」

無言。会話がない。金についてすぐに触れてくるだろうと思っていた俺は拍子抜けした。

まあ良い、向こうが話そうとしないなら俺が話そう。

「あの…」

「なあに？」

俺は思いきって聞いてみることにした。

「単刀直入に聞きますが、借金の取り立てにいらっしゃった闇金会社の方ですよな？」

女性は俺の言葉を聞いたあと驚いたように瞠目してから、あのマネキンのような顔を崩して実に人間らしい顔で笑ってみせた。

「あら、ふふっ、あなた頭の回転が速いのね。金持ちの坊っちゃんだからってなめてたのは私の方みたい。びっくりしちゃった。私ねこんななりだからよく不動産の職員と間違えられちゃうの。あなたが初めてよ？」

でも一つだけ訂正、闇金会社じゃなくて、もっとキケンなところかも」

「……は？」

いきなり饒舌になった女性に驚いて聞き逃しかけたが脳内で

「もっとキケンなところかも」

にエコーがかかった状態でループしている。



闇金以上に危険って…どこに借金してくれてんだよ…と、しばらく呆然としていると、

「でさ、本題なんだけど、アテはあるの？」

と女性が問うてきた。

借金返済のアテだろうか、それとも身寄りのアテだろうか、なんて考えるほど俺は冷静さを失ってはいなかった。これは確実に前者だ。

「いえ、ないです。」

「じゃあどうするの？借りたものは返さないとダメだね。お父さんが勝手に借りてあなたが肩代わりっていうのは少し可哀想かもしれないけど、やっぱり家族だからさ。」

死んだ父親に家族面される日が来るとは…

「じゃあ、働いて返します。」

「どこで？あのさ、あなた少し頭が良いからって私の事なめてるのかもしれないけど、こっちだってだいぶあなたの事調べてるのよ？高一でバイト経験は無し。交遊関係はそこそこ広いが浅く広くってここで親友と呼べる子は特にいない。どちらかというと取っつきにくいが喋ってみると面白いでも何処か一線引いてるって感じでしょ？」

スゴい。どちらかというところのくだりはこの数十分間の俺を見て分析した結果だろう。

彼女の分析力に驚いた俺は何も言えずに黙っていた。

すると彼女は呆れたようにため息を一つ吐くと

「なあんだ、失望した。初めてアタリの子かなあと思ったら、ダメか…面白くないなあ  
ねえ、最後に何か言いたいことある？」

アタリ、ダメ、最後

どういう意味だ？彼女は何かゲームでもしているのだろうか。  
とりあえず俺の場合つかみは良かったらしい。だが、途中から「ダメ」になってしまったと、いうことだろうか。

「最後」ということは彼女は俺との会話を何らかの形で終わらせるつもりで、どうやら「キケン」なところに所属している彼女は俺に何らかの悪影響を及ぼす形でしめるつもりらしい。

俺が金を確実に返済出来るわけないと彼女は知っている。

じゃあどうすれば俺が働いて金を返済する意欲があると信じこませられるか、次の一言にかかっているって訳だ。決めるなら次。

と、大事な局面だと分かっていたのに俺は咄嗟にこういった。

「だったら、俺が働いて返せると思ってないなら、働き口紹介してくださいよ。」

随分上から目線になってしまった。

ああ、こんなこと言うつもりじゃなかったのに…

俺の人生これで終わりか、バラバラにされて売られたりするんだろ  
うか？

なんて考えていると視界の隅で彼女がニヤリと不気味に笑った

「そっか、そうくるか、やっぱアタリだ」

そう呟く声が近くで聞こえたと思った。たら太ももに注射器のようなものを刺されていた。

どうやらお気に召したらしい。

意識がブラックアウトする寸前にそう思った。

拉致された俺

ゴゴゴゴゴゴゴ

地響きがする…どこだ？ここは。

…！あ、そうだ、俺、意識を失って…  
驚いて頭をあげると、そこは…

「おっと！気がついた？」

さっきのマネキン女だ。

俺の顔をのぞきこんでニヤニヤしている。

「はい。」

「気分とかは悪くない？」

「平気ですけど、さっきの薬何か副作用とかあるんですか？」

「んーん、別にない。聞いただけよ。社交辞令！」

「そうですか…で、あのここは…」

「おいおい、俺を無視して二人で話を進めるなんてひどいじゃないか」

いきなりワイルドなオジサンが話に割り込んできた。

インカムをつけて明らかに飛行機の機長の用な格好だ。

「ここは飛行機で、あなたは機長ですか。」

「なんだ坊主、察しが良いな！説明するまでもねえわな！」

機長がこんなところをうろついていて良いのだろうか？機長がしな

ければならないのは離陸と着陸だけというのは知っているが、一応席から離れてはいけないとか…

「なあ坊主色々なごちゃごちゃ考えてるみてえだがな、これは私用のジェット機だから良いんだよ。」

そういう事が、流石。

「パパは黙ってて！そんなことより！私あなたに説明しなくちゃいけないのよ、なんであなたをここにつれてきたのかを！！」

マネキン女が話の軌道修正をした。どうやらこの二人親子らしい。パパ、それにしてもパパが似合わない顔だ。

「あのね、私たちの勤めてる会社だけど本社は海外にあるの。まあイタリアなんだけどね。で、聞いたことあるかもしれないけど、スぺッキオカンパニーって言うの。」

「表向きはな、」

スぺッキオカンパニー…聞いたことはある。確か、最新鋭の技術を持つていてイタリアの政治は何%か近くその会社に牛耳られてるとか。

スぺッキオは日本語で鏡という意味があり、鏡が光を吸収するように他者からの意見を幅広く取り入れて、鏡が綺麗に虚像をうつすように、望み通りにつくりあげるという願いを込めた会社名らしい。

表向きは、ということにはあえてつつまないのでおこう。これでも大手企業の御曹司だったこともあってだいたいは想像がつく。裏で悪どいことをやっているとか、そんなんだろう。

「ええ、分かります。前に学校の課題で調べたことがありますから。それに表向きはということに関しても一応これでも大手企業の御曹司だったこともあって分かっているつもりです。」

すると、マネキン女と、そのパパは助かったという顔をした。

「それなら、話が早いぜ？」

「もう！パパは黙ってて、いちいち説明にちゃちゃいれないでよ。」

「へいへい、悪かったねーいつからこんな娘になったんだか、な坊主。」

いきなり話をふられて焦った。

だが、ここで親子ゲンカはやめにして説明に戻そうとまたマネキン女が軌道修正をした。

「それより！分かっているなら話は早いわ。」

あなたにはその表じゃない人達のお世話をしてほしいの」

意味が分からない。ならメイドを雇えば良いのではないか？

「意味が分からないって顔してるわね。仕方ないわ普通そうよ。じやあ説明するわね、えつと、」

「つまりだ！普通のメイドじゃその裏でなんやらやってる連中の世話は見きれねえから頭の回転が速くて察しのいいてめえにやってもらおうって魂胆って訳だよ。」

全く、女の話はなげえから疲れるよな？」

途中からマネキン女のパパに代わった。  
どうやらプライドが高いらしいマネキン女はぶちぶちと文句を言っている。

「なるほど、金持ちの坊っちゃんて礼儀は一通り習っていて、男だから力仕事も出来るし、遠慮することもない。それにうちではメイドを雇っていなかったから俺は家事も出来るし、借金返済の為に働いているんだから、給料も払う必要はない。  
こんなオトク物件使わずにどうするって訳ですね。」

と、俺の見解を述べてみたところ

「さっすが！やっぱり私の見込んだ通り！！話が速くて助かるわ！！」

「って訳で、初日から仕事頑張れよ！じゃ、あ、なつと！」

いきなり窓を開けたと思ったら背中を突き飛ばされた  
飛行機の窓から突き落とされた！

「え、な、ちょ、どういうことだああああ！！！！」

「パラシュートついてるからだいじょー」

大丈夫って言いたかったのだろうか、もう風圧で聞こえない。

そのまま俺の意識はまたブラックアウトした。

ーその頃機内ではー

「あのこならやってくれる？」

「多分な、何だかんだ言って巻き込まれてくれんだろ。」

「そうよね！じゃあ期待してよっと！将来良い男なりそんな顔してたし！」

「おいおい！結婚はさせないからな！」

「なによ！パパの親バカ！」

なんてほのぼのとしたやりとりがされていた。

それをパラシユートで落下中の矜慈は知るよしもない。



## おとされた俺

…痛い。全身に力が入らない。どうやら俺は自社用ジェット機からパラシュートで落とされたあと意識を失ったらしい。

ゆっくりと目を開けると葉のついていない木々と、朝日が視界に映った。

ここは、どこだ？ 森…か？

あのマネキン女やそのパパの口ぶりからすると、ここはイタリアにある本社の敷地の中でも裏でなんやらやってる連中の敷地。ということとは間違いないだろう。

それにしてもスゴいな、森まであるのか。実用性は限りなく謎だが。ふと気がついた。俺は怪我をしていないだろうか？ パラシュートをつけていたとはいえ、かすり傷だけですむはずがない。と、思い確認しようと上体を起こした。

「いつ…！」

「た」まで発音できないほどの激痛が走った。

左肩に木の枝が貫通している。どうりで痛いわけだ。抜いてしまいたい、生憎止血出来るようなものはないし、このままししていた方が良策だろう。だが、このままではどちらにしろ出血多量で死は免れないため、とりあえず人を見つけようお、ボタボタとおぞましいまでの量の血をたらしながら俺は立ち上がった。

肩以外は幸いにして、落ち葉がクッションになっただけで背中打撲ぐらいですんでいるがもし頭を打ったらあの二人はどうするのつも

りだったのか…

とりあえず森を抜けようと、フラフラ歩き出した。

しばらく歩いても、森の出口は分からず俺がもといた場所に戻ってきたとき人を発見した。

白衣を着ていてしゃがみこんで俺のパラシュートと、血溜まりを見ている。

綺麗な金髪できつとイタリア人なんだろう。

「あの、すみ…あ、そうだ、日本語通じないよな。え、excuse me・This is my blood」

すみません。それ俺の血です。って何だ。

しくじった。変な声のかけ方をしたかもしれない。まず英語は通じるんだろうか？

「え？君の血？ほ、ほんとだ！大変じゃないか！おいで、僕のプロットで治療しよう！」

俺に気付くや否や俺以上に慌てている。

よく分からないがこの人はいいい人そうで警戒心が薄いということは分かった。

しかし、イタリア人に、しては随分と流暢な日本語だ。

## 白衣眼鏡のイタリア人と俺1

移動中幸いにして誰とも会うことはなく、彼曰くプロットという研究室（？）のような場所で治療は無事終了した。

若干痛みはあるが、手際の良い丁寧な処置のおかげでだいぶ緩和された。これ以上悪化することは多分ないだろう。

「えつと、ところで君はどちら様かな？」

僕はスペックオカンパニーのサイド・ディエトロ所属、医師兼研究員のロイス・ヴェンティ。君は？」

『ロイス』と言うらしい男は医師と言われて大変納得出来る顔立ちだ。見た目だけで判断するのは失礼だが、大きめの眼鏡にその奥で細められる優しいそうな目、手入れのされた肩くらいで切り揃えられた髪の毛、男にしては長めだがだらしないのは彼が気品に溢れているからだろう。

「ご丁寧にありがとうございます。春山<sup>ハルヤマキヨウジ</sup>矜慈と言います。」

当たり障りのない、挨拶で返した。

下手な事を言つて不審度に拍車をかけたくない。

「そっか！それで君は一体何者なの… かつ、な？」

…！！警戒心が無さすぎると思っていたが、こういうことか。あきらかにインテリ顔をしていて体の線も細く、運動が得意そうとはお世辞にも言えない彼もやはりまぎれもなく『裏で悪どいことをやっている連中』の一人のようだ。

『何者なの』で椅子から立つやいなや、『か』で一気に俺との間合いをつめ、右の肘から手首の部分の腕を、俺の首にあて壁に押し付けた。いつのまに持ったのか、右手にメスらしき何かを持っている。その銀色の物体にあたり反射した光が俺の目をさした。

「か…はっ…。」

ギリギリと、壁に押え込まれているためか息苦しくなってきた。

コイツは一体何がしたいんだ？

第一首なんか絞めたら分かるものも分からないだろう。喋ることはおろか、一歩間違えれば殺す事だってできる。

くそ、どうすればこの状況を打開出来る？

今までの情報や記憶をたよりにざっと10通りほど考えた、その時絶妙なタイミングで奴の携帯端末が吉本新喜劇の音楽をならして鳴り響いた。

よりによって吉本新喜劇…か…。

## 白衣眼鏡のイタリア人と俺2

「お、きたきたー!!」

さっきまでの緊迫した雰囲気はどこへやら奴は、メール?と、思われるものをチェックし始めた。

あ、、、ダメだあと少しでオチる…

「うそっ!ごめんごめん!!君の首しめてんのすっかり忘れてた」

というと、今まで押し付けたい腕をいきなり離れた。

当然俺はそのまま床に落ちる訳で

ドサッ

「ぐっ…」

こいつ…分かってやってんのか?相当腹黒いな。

と、そんな表情はおくびにも出さず、内心でめっちゃめっちゃ睨んでい

ると

「ふふ、演技派なんだあ…意外だね?いや、」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5062x/>

---

巻き込まれ体質の傍観者

2011年11月4日16時18分発行